

政権と北東アジア

日韓米セミナーから

＝上＝

歴史的転換ではない

本社主催「日韓米セミナー」

は、「レーガン政権と北東アジア」をテーマとし、二つの報告書

(概観)を基礎にして討議がおこ

なれたが、第一の問題点とし

て、レーガン政権の北東アジア

政策と、朝鮮半島をめぐる周辺

大國の情勢認識が取り上げら

れた。

レーガン新政権の北東アジア政

策は、その世界政策と同じよう

に、また金が表面化していない

ので、「未定形」(中嶋教授)な

部分が残されているという前提に

立ちながらも、在韓米軍撤退の白

紙化に象徴されるような政策の

変化が明白にうかがえるとの認識で

はほぼ一致した。

だが、この政策の変化について

は「歴史的転換が起こったわけでは

ない」(ジョー教授)という見

方でも共通した。例えば、神谷教授

は「レーガン政権の世界政策を対

ソ強硬論を中心とする強い路線と

係の改善を、同盟関係の模範と

して示そうとしており、金正日

する見方が日本では多かったが、
それは一本調子のもものではな
く、米軍撤退の白紙化、韓軍の現代
化推進という政策変化も、軍事力
の拡大というよりも、防衛的な
質的改善だと思つ」とのべてい
る。

米の政策変化は平和 と安定に寄与し得る

を見逃してはならない。朝鮮半島
にたいする政策にも明らかに政策
の変更がみられるが、基本姿勢は
変わっていない。カーター政権末
期の政策の継承という性格が濃厚
だ」という見解を示した。

ジョー教授も「ニクソン・キッ
シンジャー時代の継承と見るべき
だ。当面、レーガン政権は米韓関

係の改善を、同盟関係の模範と

して示そうとしており、金正日

する見方が日本では多かったが、

それは一本調子のもものではな

く、米軍撤退の白紙化、韓軍の現代

化推進という政策変化も、軍事力

の拡大というよりも、防衛的な

質的改善だと思つ」とのべてい

る。

- セミナー参加者
- ▽韓国側 朴奉植・ソウル大教授
 - ▽米側 側 二・ファン・ジョー・アリゾナ州立大教授
 - ▽日本側 側 二・慶大教授、中嶋徹雄・東京外大教授、
寺谷弘三・青山学院大教授、栗本勝一・サンケイ
新聞客員論説委員
 - ▽コーディネーター 栗田穂・サンケイ新聞コラムニスト



セミナー参加者のうち右からジョー、神谷、中嶋の三教授(石黒 潔撮影)

また中嶋教授は、「レーガン政
権の北東アジア政策が未定形なの
は、レーガン政権内部が二重構造
でグローバル・ポリシー(世界政
策)で固まってきたのか、米韓台
という保守的体質で固まってきた
のか、二つの田畑が一致していな
いところから起こっている。しか
しレーガン政権が北東アジアに重
点をおこうとしているとは確か
だ」とのべた。

南北解決では両論

この結果、朝鮮半島の南北問題
は、周辺大國間の関係よりも「南
北自体の自主解決の方向が強ま
る」(中嶋、神谷両教授)という
展望が出された。

それにたいし、朴教授から「朝
鮮半島にたいする周辺大國の関心
が弱まることはあるまい。仮に関
心が弱まるとしても、それによっ
て南北問題の解決が早まると思
わない」という否定的意見が出さ
れた。

結局、討論参加者のほとんどが
レーガン政権の北東アジアの安全
保障政策については、肯定的な見
方が強く、それが北東アジアの平
和と安定をもたらすとの楽観的展
望の根拠になっていることがうか
がわれた。

【栗田 穂・本社コラムニスト】

要案は、対内的要因が対外的要因
よりも重要になるという点だ。こ
れにたいし、ジョー教授は
「北東アジアの将来が西側より明
るいという見方には賛成できな
い」とのべた。

周辺大國の朝鮮半島にたいす
る情勢認識について、神谷教授は
「八〇年代半ばを対象に考える
と、朝鮮半島を中心とする大きな
願をかかえている。同じことが韓
とへのべた。

政権と北東アジア

日韓米セミナーから

北の特異な国家体制
レーガン政権の北東アジア政策
の変化については、討論参加者の
ほとんどが肯定的評価を下した
が、朝鮮半島の将来の展望とい
う点になると、楽観論と悲観論分
かれた。これは北からの脅威にたい
する認識の違いから出ているよ
うに思われた。

北からの脅威といふは、第一に
北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和
国)の軍事力が挙げられる。この
軍事力について、塚本勝二氏(サ
ンケイ新聞客員論説委員)は「北
の軍事力を軽視できない。脅威を
軽く見るのは危険。北は七五年
からの兵力増強で、正面戦力がい
ちじるしく強化された。現在の状
況では、ゲリラ戦など非正規戦し
かないが、在韓米軍の撤退とい
う事態が起れば、なんらかの行動
に出る可能性がある」と指摘し
た。

また柴田本社コラムニストは、
「北からの脅威は、在韓米軍撤退
の白紙化、韓国軍の近代化推進に
よって、南の抑止力が強まってき
てきた」と指摘した。

また最近、西側の北朝鮮専門家
の間で観測されている、北のソ連
寄りについては、中嶋嶺雄教授
は「東京外語大」は「金日成主席は
ソ連からも中国からも信用を失
っており、中国もソ連も、北の言
をすく、イヤな顔をする。米國
や日本が中国といっしょになっ
て、北を包囲する状況は打開
する必要がある」と指摘した。

また最近、西側の北朝鮮専門家
の間で観測されている、北のソ連
寄りについては、中嶋嶺雄教授
は「東京外語大」は「金日成主席は
ソ連からも中国からも信用を失
っており、中国もソ連も、北の言
をすく、イヤな顔をする。米國
や日本が中国といっしょになっ
て、北を包囲する状況は打開
する必要がある」と指摘した。

北の脅威軽視は危険 中ソ影響力競争に注目

「北の脅威を軽視できない。脅威を
軽く見るのは危険。北は七五年
からの兵力増強で、正面戦力がい
ちじるしく強化された。現在の状
況では、ゲリラ戦など非正規戦し
かないが、在韓米軍の撤退とい
う事態が起れば、なんらかの行動
に出る可能性がある」と指摘し
た。

また最近、西側の北朝鮮専門家
の間で観測されている、北のソ連
寄りについては、中嶋嶺雄教授
は「東京外語大」は「金日成主席は
ソ連からも中国からも信用を失
っており、中国もソ連も、北の言
をすく、イヤな顔をする。米國
や日本が中国といっしょになっ
て、北を包囲する状況は打開
する必要がある」と指摘した。

また柴田本社コラムニストは「北
からの脅威は、単に軍事力や兵管
家体制だけでなく、北の特異な金
日成独裁体制、子息の金正日氏を
代表者が報告するとき、金日成主
席の引用の箇所になると、金正日
主席の言葉を繰り返す」と指摘し
た。

また最近、西側の北朝鮮専門家
の間で観測されている、北のソ連
寄りについては、中嶋嶺雄教授
は「東京外語大」は「金日成主席は
ソ連からも中国からも信用を失
っており、中国もソ連も、北の言
をすく、イヤな顔をする。米國
や日本が中国といっしょになっ
て、北を包囲する状況は打開
する必要がある」と指摘した。

また柴田本社コラムニストは「北
からの脅威は、単に軍事力や兵管
家体制だけでなく、北の特異な金
日成独裁体制、子息の金正日氏を
代表者が報告するとき、金日成主
席の引用の箇所になると、金正日
主席の言葉を繰り返す」と指摘し
た。

また最近、西側の北朝鮮専門家
の間で観測されている、北のソ連
寄りについては、中嶋嶺雄教授
は「東京外語大」は「金日成主席は
ソ連からも中国からも信用を失
っており、中国もソ連も、北の言
をすく、イヤな顔をする。米國
や日本が中国といっしょになっ
て、北を包囲する状況は打開
する必要がある」と指摘した。



セミナー参加者のうち、右から塚本、寺谷、朴三氏と柴田・本社コラムニスト

当面ない中ソ改善

北朝鮮と領土を接する中韓大
国の接近は、北に影響を及ぼす重
要な要素だが、中ソ関係の将来に
ついて、中嶋教授は「中ソ対立は
毛沢東の反ソ主義が主要な原因だ
ったが、毛沢東の非毛沢東化の推
進、旧劉少奇ラインの指導権掌握
によって毛路線は消えつつある。
また西側の支援で近代化を達成す
ることが期待できないとすれば、
中ソ改善の余地がある」と指摘し
た。これにたいし、寺谷弘三教授
(青山学院大)は「中ソ和解は今
世紀中では考えられない」とし、神
谷不二教授(慶応大)も「八〇年代半
ばまでという時期で考えざるを得
ない」と天変地変は起きる」とい
う。中ソ関係悪化の歴史が長かつた
だけに、改善にも相当な時間がかか
るのではないかと一定の評価を
おこなった。

この討論では、北からの脅威に
ついて、朝鮮戦争で同族が血を流
し合ったという悲劇を経験し、現実
に南北分断と北からの軍事的脅威
に直面している韓国と、そうした
経験や現実の脅威をあたらない日
本との間に認識の差がある」と、
これまで木村元伊東前外相の脅
威肯定論が韓国を刺激したとこ
でもわかるように、いまなお、こ
の認識についてのギャップが大変
いことが感じられた。

【柴田 穂・本社コラムニスト】
また柴田本社コラムニストは「北
からの脅威は、単に軍事力や兵管
家体制だけでなく、北の特異な金
日成独裁体制、子息の金正日氏を
代表者が報告するとき、金日成主
席の引用の箇所になると、金正日
主席の言葉を繰り返す」と指摘し
た。